

担任の先生へ

発音に誤りのある子ども（構音障害）について

○構音障害とは

発音を誤ってしまうには、それなりの理由があります。

- ① 器質的なもの（噛み合わせや舌の長さ、口蓋裂、呼気の鼻漏れなどが原因の場合）
 - ② 機能的なもの（発達の未熟やはっきりとした原因がわからないもの）
- があります。

器質的なものは、発音の練習だけでは改善が難しく、医療からのアプローチが不可欠ですが、機能的なものが原因の誤りについては、きちんとしたプロセスの練習を行えば、改善することが多いです。ただ、お子さんにより改善にかかる時間は様々です。

具体的には・・・

- ・サ行音がタ行音（サカナ⇒タカナ）、カ行音がタ行音（カラス⇒タラス）のように置き換わってしまっている場合
- ・子音や音節が省略されている（ミカン⇒⇒ミアン）場合
- ・ひらがなで書き表せないような歪んだ発音になっている場合
- ・全体的に発音がはっきりしない場合

発音以外にこんな様子も見られます。

- ・おりがみが上手に折れなかったり、のり付けが下手だったりなど指先が不器用だと感じる。
- ・うがいができなかったり、よだれがたれたり、風船がふくらませなかったりする。
- ・日記や作文の表記上に誤りがある（ラクダ⇒ダクダ・～です⇒～れす）。



○担任の先生にお願いしたい配慮事項

「話すことが好き」という気持ちを育てるために、次の様な点にご配慮・ご協力いただければと思います。

① 発音が間違っても、言い直しをさせたり注意したりしない

正しく言おうと思っても、正しく発音できない状態です。発音が間違っても、言い直しをさせたり、注意したりしてははっきり発音させようとする事は、かえって、言葉に対して劣等感をもたせてしまいます。

ウサギでしょ。もう一回
いってみてごらん！



② ごく自然に応答して、正しい音を聞かせる

子どもが、「ウタギがね。」のように、誤って発音した場合は、「そう、ウサギが・・・したの。」のように、普通に答えてください。「ウサギ。ウタギじゃなくて、ウサギよ。」のような応答は、正しい音を聞かせるつもりでも逆効果になってしまいます。



③ 自信を育てる

「発音が誤っていて、相手に通じなかった」という経験をしていると、話すことさらには、行動全体が消極的になってしまうことがあります。子どもの話を聞いたり、小さなことでもほめたりするなど、クラスの中で認められる経験を増やしてください。



④ 周りの子どものからかいがあったときは、きちんと注意する。

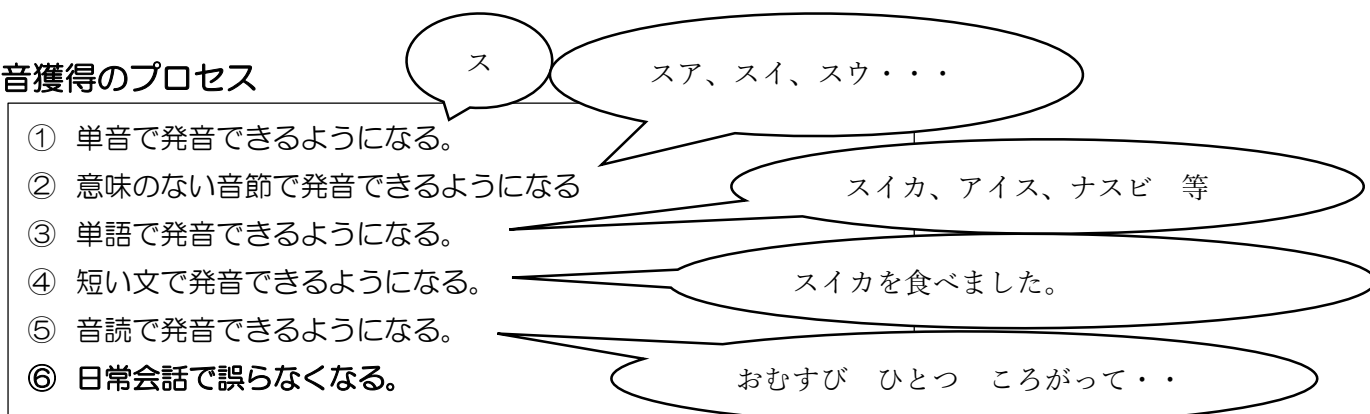
「言いにくい発音があるから、発音の勉強をしてがんばっている」ということクラスの子どもたちに話していただけたらと思います。



〇ことばの教室では

一人一人に合わせて指導プログラムを立て、毎週1回程度指導します。聞き分けや聞き取りの練習や口の体操、発音の練習などを本人の段階に合わせて個別に学習します。

発音獲得のプロセス



日常会話では、このような段階を経てからでないとい発音は改善しません。また、別の言い方をすると子供たちは、日常会話まで改善するには、このような地道な練習を、時には家庭でも宿題にご協力いただいて、毎日のように続けています。担任の先生たちから、通って練習を続けていることを是非積極的にほめてあげてください。



また、先生たちから何か不安なことや相談したいことがありましたら、是非、教室まで遠慮なくお電話ください。